

現代教養学部自己点検・評価報告書
(学科カリキュラムを中心に)

2013 年 11 月

東京女子大学 自己点検・評価委員会

現代教養学部自己点検・評価（学科カリキュラムを中心に）

本学は、キリスト教主義を基盤とする女子高等教育機関として1918年に創建され、2018年には創立100周年を迎える。この間、2009年に文理学部と現代文化学部を統合再編し現代教養学部を創設するなど、本学建学以来の理念であるリベラル・アーツ教育のいっそうの発展を期して、改革を行ってきた。2011年度には全学共通カリキュラムの点検・評価を行い、2013年度には、現代社会に活かすことのできる教養という視点に立って再構築した新カリキュラムをスタートさせた。

2012年度は学科カリキュラムの点検・評価を行い、本学部の発足以来の成果と問題点を明らかにし、2013年度は、2014年度に向けて、より体系性、順次性のある学科カリキュラムを構築し、本学の学生諸姉に、より充実した教育を提供すべく準備を進めた。

大学を取り巻く環境を左右する大きな問題として、18歳人口の減少がある。本学が、高等教育機関として質を保持し、広く社会に貢献できる教養と専門性とを具えた女性の育成において成果をあげ、多くの志願者を得るためには、今後も恒常的に点検、評価を行い、改革・改善の道筋を立てておかなければならない。点検・評価の積み重ねは、本学の将来像を明確にし、これに従って教学の刷新をはかり、本学のリベラル・アーツ教育の伝統の意義を広く現代社会に発信することに資するものとなる。

2013年度の学科カリキュラムを中心とした自己点検・評価の結果をご高覧いただければ幸いです。

2013年11月

東京女子大学学長 眞田 雅子
自己点検・評価委員長 下出 鉄男

目 次

【現状の説明】	1
人文学科	1
国際社会学科	3
人間科学科	6
数理科学科	8
専攻間・学科間での学問領域の重複について	9
【点検・評価、長所・問題点】	10
《学部・学科の構成》	10
《学科別の問題点》	10
人文学科	10
国際社会学科	11
人間科学科	11
数理科学科	12
《複数の学科・専攻にわたる問題点》	12
【将来の改善に向けた方策】	13
学部として取り組む課題	13
学科として取り組む課題	14
今後に向けて	14

< 付録 > 各学科・専攻の対象学問分野

現代教養学部 自己点検・評価報告書（学科カリキュラムを中心に）

点検・評価項目

学部の理念に基づく学科構成の適切性、カリキュラムの適切性

（各学科の学問領域は巻末の資料参照。現代教養学部の教育課程等については、http://office.twcu.ac.jp/dept_grad/gendai/index.html 参照。）

【現状の説明】

現代教養学部は、「広い識見と創造性を有し、専門性をもつ教養人として、現代社会の多様な課題を主体的に解決しうる人物」の育成を目標とし、既存の文理学部、現代文化学部を再編し、2009年4月に開設された。

現代教養学部の学科構成は、人文学科、国際社会学科、人間科学科、数理科学科の4学科である。各学科の理念、目的、学科を構成する専攻、カリキュラムの骨子は以下のとおりである。

人文学科

哲学、日本文学、英語文学文化、史学の4専攻を置き、哲学、文学、史学の各分野を横断的に学ぶことを通して、人間の文化に関わる基礎的な知識を広く修め、考究の姿勢、応用能力を社会のあらゆる分野に生かし、文化の創造と社会の発展に貢献できる人物の育成を目的とする。

学科構成の柱となる学問分野は、哲学専攻の哲学、日本文学専攻の日本語学、日本文学、中国文学、英語文学文化専攻の英語文学、英語学、史学専攻の歴史学となっている。

各専攻では、専門的な方法論と知識を体系的に学ぶために、それぞれ必要な領域を以下のように設定している。

哲学専攻では、西洋哲学、倫理学、美学・芸術学、キリスト教学、東洋思想を領域としている。日本文学専攻では上述の3本の学問分野の柱に加え、日本語の研究方法としての言語情報処理、日本文化学を領域としている。英語文学文化専攻では英語文学、英語学、英語圏文化を領域としている。史学専攻では、歴史学、日本史、東洋史、西洋史の領域を設定している。

本学科のカリキュラムの構成は、6つの科目区分（基盤講義、特殊講義、基盤演習、発展演習、特殊演習、卒業論文）に分けられている。

全専攻の1年次必修として、基盤講義には、人文学の基本的な考え方と方法を理解する

ために「人文学入門」、基盤演習には人文学の3分野に共通する基礎的な知識とスタディ・スキルの習得、学問と誠実に向きあう心構えを身につけるために「人文学基礎演習」を設置している。

各専攻では、上記の科目を土台に各専門分野の特色を活かしつつ、以下のようなカリキュラムを編成している。

< 哲学専攻 >

1年次では、基盤講義の「哲学入門」・「」、基盤演習の「哲学基礎演習」により、哲学の初歩的知識と哲学書の読解法を学び、哲学的な思考法とその表現の仕方を身につける。2年次では、引き続き「哲学概論」「2年次演習(哲学)」・「」によって、哲学の基本的な姿勢や、より専門的な哲学書の読解法を身につける。2、3年次にかけては、基盤講義の「倫理学概論」「美学概論」「西洋哲学史 A・、B・」・「キリスト教史」「東洋思想史」等の通史的科目を学び、研究のための基盤を獲得する。また特殊講義を履修して、最新の研究状況についての知識を獲得する。3年次では、発展演習において、卒業論文で扱うべき各自のテーマを見定めるとともに、外国語で書かれた哲学文献を読み解く訓練をし、洞察力・構想力を深めていく。4年次では、引き続き特殊講義・発展演習を履修して研究の深化をはかるとともに、「4年次特殊演習(哲学)」を履修し、各自課題を設定して、「卒業論文」の作成にあたる。

< 日本文学専攻 >

各分野の柱を有機的に関連させ3分野の素養の上に関連分野の知見を広げるようなカリキュラムとなっている。1年次では基盤講義の日本文学(古典・近現代)、日本語学(文法・日本語史)、漢文学それぞれの分野の入門5科目で、日本文学専攻の学びの基礎を固める。2年次では、概論科目で分野の全体像を把握する一方、基盤演習の科目・特殊講義の科目を通して、その分野における資料の扱い方、解析の方法を習得する。3年次では、専攻した分野の研究方法を深く身につけるために「3年次演習」を履修し、卒業論文に必要な能力を培う。4年次では、「4年次特殊演習(日本文学)」を履修し、これまで培ってきた知見と問題意識に従い、自ら課題を設定し指導教員の指導を受けながら、「卒業論文」を執筆する。

< 英語文学文化専攻 >

4年次に英語で「卒業論文」を書き、あるいは「Final Presentation」を行うこととなるが、これに必要とされる英語表現の基礎を養うため、基盤演習に1年次でネイティブ・スピーカーによる「Freshman English Seminar」を置き、英語で考え表現する基礎力を養う。また、「英語文学基礎演習」「英語学基礎演習」という必修に準じる科目を1年次に履修することで、テキストを深く理解し、言葉のしくみを考える基礎的な力を養う。2年次には「Presentation 基礎演習」・「」「Sophomore Reading & Writing」・「」で英語による、より専門的な学問研究のために必要なスキルを身につけ、さらに基盤講義の「英語学基礎論」「英語文学・文化基礎論」や特殊講義の科目などで、英語圏の文学や文化、及びそれを構成する英語という言語について幅広い視点で分析する力を涵養する。3年次では、必修科目の「3年次特殊演習(英語文学文化)」及び「Junior Composition」で専門分野の知識や分析手法を応用的に実践する。4年次においては「4年次特殊演習(英語文学文化)」で専門分野について自ら問いを立て資料収集を経て得た知見を英語で論理的に表現する力を身につける。なお、本専攻は、「卒業論文」あるいは「Final Presentation」のいずれかを4年次の必修としている。プレゼンテーションのコースでは、ネイティブ・スピーカーによ

る英語表現能力の強化のために指導を行っている。

<史学専攻>

1、2年次に基盤講義の「史学概論」「日本史概説・ 」「東洋史概説・ 」「西洋史概説・ 」を履修し、日本と世界の歴史や文化に関する基礎的な知識を習得し、特殊講義において自らの問題関心に沿って特定の領域について深く学べる体系になっている。また史料や原典にもとづいて事実を確かめ、構成力を育むために、1年次前期の「人文学基礎演習」では日本語で書かれた初学者向けの歴史書を、1年次後期の「歴史学基礎演習」と2年次前期の「歴史学演習」では日本語で書かれたやや専門的な歴史書をテキストとして用いている。学生がそれぞれの専門分野に分かれる2年次後期の「日本史基礎演習」「東洋史基礎演習」「西洋史基礎演習」では各専門分野の研究書及び史料を、3年次前・後期の「日本史演習」「東洋史演習」「西洋史演習」では専門知識の深化のために、日本語や外国語で書かれた研究書及び一次史料をテキストとして用いている。3年次後期と4年次後期の特殊演習では、調査・研究・報告・討論を実践的に積み上げて、その成果を「卒業論文」にまとめあげるための総合的能力を段階的に育成している。

人文学科科目の卒業に必要な単位数は64単位。その中に「人文学入門」2単位、「人文学基礎演習」2単位、「卒業論文」又は「Final Presentation」8単位を含むこと、自専攻科目は42単位を修得することとしている。

人文学科の設置科目数は、403科目（内講義科目が240科目）で、通年換算で222コマの授業を開講している。履修者が10名以下の講義科目は2011年度16科目、2012年度は7科目である。1授業1科目の原則から、科目名の末尾に記号を付けることで、同一分野の科目を複数回履修し、自分の関心のあるテーマについて深められるよう配慮されている。しかし、3回履修する学生は限られる。日本文学専攻の場合、「同一科目名で3年ごと開講の科目」*を2回履修する学生は23.1%、3回履修する学生は7%である。史学専攻の場合、2回履修する学生は18.0%、3回履修する学生は5.2%である [2012年度前期の履修登録による]。

(* 例：日本語史(古代中世)A__、日本語史(古代中世)B__、日本語史(古代中世)A__、日本語史(古代中世)B__、日本語史(古代中世)A__、日本語史(古代中世)B__)

なお、人文学科の4年次進級条件とする科目として、哲学専攻は「哲学入門」、「哲学基礎演習」、「2年次演習(哲学)」、英語文学文化専攻は「Junior Composition」、「3年次特殊演習(英語文学文化)」、史学専攻「3年次特殊演習(史学)」を課している。日本文学専攻は特に設けていない。

国際社会学科

国際関係、経済学、社会学の3専攻を置き、学問分野として相互に関連した3つの分野を横断的に履修し、社会の多面的な姿を捉えることを通して広い視野と柔軟な問題解決力を養う。各専攻の専門性を身につけながら、身近な地域社会においても国際社会においても、共生社会実現のための実践力のある地球市民として活躍できる人材の育成を目的とす

る。

学科を構成する柱となる学問分野は、国際関係専攻の国際関係学、地域研究・比較文化、文化人類学、経済学専攻の経済学、社会学専攻の社会学である。

各専攻は、上述の学問分野に基づき、次の領域で構成されている。

国際関係専攻では、現代の国際社会を構造的に理解する国際関係学、諸地域を多面的に扱う地域研究・比較文化、国境横断的、通文化的に複数の地域を捉える文化人類学を中心に置き、歴史学、政治学、女性学、社会言語学の各科目を周辺に配置している。経済学専攻は、経済理論、経済史、経済政策、応用経済学、統計学、社会学専攻は、社会学理論、社会調査、老年社会学、労働社会学、福祉社会学、家族社会学、文化社会学、女性学・ジェンダー論の領域を設定しカリキュラムが構成されている。

本学科のカリキュラムの構成は、6つの科目区分(入門、基礎講義、応用講義、基盤演習、発展演習、卒業論文)に分けられている。

全専攻の1年次必修として、入門の「国際社会論」と基盤演習である「国際社会基礎演習」を課し、「国際社会基礎演習」は、3専攻混合のクラス編成としている。

各専攻では、上記の科目を土台に各専門分野の特色を活かしつつ、以下のようなカリキュラムを編成している。

< 国際関係専攻 >

入門の「文化人類学入門 ・ 」を1年次に、「比較文化論 ・ 」「国際関係史 ・ 」を1,2年次に履修し、専攻で学ぶ基礎力育成のための異なる文化を公平に見渡せる視点や歴史感覚を養う。1年次では、さらに基盤演習の「基礎演習(国際関係)」で、スタディ・スキル(レポート・小論文の書き方、口頭発表の仕方、図書館やインターネットを使った文献の探し方など)やスチューデント・スキル(大学生に求められる一般常識や態度など)を培う。1年次から3年次を対象とする基礎講義では、研究対象となる諸地域(日本・中国・朝鮮・東南アジア・アメリカ)の基礎知識を学ぶ。2年次では、入門の「国際関係論 ・ 」、基盤演習の「2年次演習(国際関係) ・ 」を履修する。2年次から応用講義の各科目が履修できる。3年次では、「3年次演習(国際関係) ・ 」とあわせて、演習のテーマに沿った演習担当教員による応用講義(3・4年次対象)を指導により必ず履修させている。4年次では、3年次までに深めた専門知識や方法論を自らの問題意識と結びつけ、「4年次演習(国際関係) ・ 」を履修しながら「卒業論文」を執筆する。

< 社会学専攻 >

1年次では、入門の「社会学概論 ・ 」、基盤演習の「基礎演習(社会学)」で、社会学を学んでいくために必要な基礎知識、学習の技法(研究発表の仕方、質疑・応答や討論の行ない方、文献や資料などの集め方、調べ方)を身に付ける。2年次では、「社会学史

・ 「社会調査法A」、「2年次演習(社会学)」を中心に、社会学全般の体系的な知識、社会的現実に対して事実を解明するための量的・質的社会調査法に関する知識と解明の姿勢を習得する。また、応用講義の各科目を履修し、多面的に社会問題を理解していく。3年次では、少人数で行われる「3年次演習(社会学)」で専門性の高い知識を養い、演習別に分かれて履修する「社会調査実習」では、研究領域によって異なる調査方法を身につける。4年次では、「4年次演習(社会学)」を履修しながら、大学での学修の集大成として、各自が関心をもつ具体的なテーマについて「卒業論文」を作成する。

< 経済学専攻 >

1年次では、入門の「ミクロ経済学入門」「マクロ経済学入門」、基礎講義の「初級ミクロ経済学」「初級マクロ経済学」により、経済学専攻で学ぶ基礎力を培う。また、「基礎演習(経済学)」において、分析対象となる経済の仕組みを理解し、経済学を学んでいくために必要な学習の技法(研究発表の仕方、質疑・応答や討論の行ない方、文献や資料などの集め方、調べ方)を学ぶ。2年次では、「2年次演習(経済学)」及び基礎講義の諸科目を通じて、経済学的思考を深化させ、分析方法を身につける。「中級ミクロ経済学」、「中級マクロ経済学」は、理論経済学の基礎理論を習得し、社会問題のさらなる分析能力を養う。この他、基礎的な経済理論を習得する「公共経済学」、経済学の理論を現実の経済問題に適用する「経済政策」、経済理論の歴史的展開を学ぶ「経済学史」、市場経済の成立と変容を理解する「経済史」、基礎的統計学の知識を習得する「統計学」などを履修していく。3年次では、少人数で行われる「3年次演習(経済学)」を核として専門性を高め、経済学の多様な分野と隣接する領域の知識を豊かにすることによって、柔軟な応用力を養う。4年次では、「4年次演習(経済学)」を履修するとともに、これまでに身につけた知識と方法を統合し「卒業論文」を作成する。

なお、国際社会学科の演習科目は、国際関係専攻は、半期科目であり、経済学専攻及び社会学専攻は通年科目となっており、専攻間で統一されていない。

国際社会学科科目の卒業に必要な単位数は64単位。その中に「国際社会論」2単位、「国際社会基礎演習」2単位、「卒業論文」8単位を含み、自専攻科目は42単位を修得することとしている。

なお、各学問領域の基礎的科目として基礎講義を置いているが、国際関係専攻のみ選択必修を設けていない。また、同専攻は入門の区分の中に3年次でも履修できる科目がある。

国際社会学科の設置科目数は、180科目で、通年換算で139.5コマの授業を開講している。履修者が10名以下の講義科目は2011年度は8科目、2012年度は6科目である。ほとんどが国際関係専攻の科目である。

国際社会学科で、経済学専攻と社会学専攻は4年次進級条件とする科目を設けていな

い。しかし、国際関係専攻では、「基礎演習（国際関係）」「2年次演習（国際関係）」「3年次演習（国際関係）」5科目計10単位を条件としている。

人間科学科

心理学、コミュニケーション、言語科学の3専攻を置き、心理学、コミュニケーション学、言語科学の分野を横断的に学ぶことを通して、分析能力、問題解決能力を養い、人間・社会・世界を科学的に探究し、現代に生きる人間のあり方を考究・提言できる人物の育成を目的とする。

柱となる学問分野は、心理学専攻の心理学、コミュニケーション専攻のコミュニケーション学、そして言語科学専攻の言語研究、言語教育である。

各専攻内の領域については、以下に示す通りとなっている。

心理学専攻は、心理学（認知・知覚、発達・教育、臨床、社会）の4領域を置いている。コミュニケーション専攻は、コミュニケーション学のうち、心理、社会、メディア、情報、国際・文化の5領域を置き、現代における人間や社会の問題をコミュニケーションの視点から探求していく。言語科学専攻では、言語研究（英語、日本語、対照研究、言語調査）翻訳研究、言語教育という面から言語の諸問題を多面的に扱う。言語構造の分析や言語習得メカニズムの研究が最新の理論や知見に基づく科学的な手法を駆使して行われる言語研究の一方で、翻訳研究や言語教育（英語教育・日本語教育）という実践的・応用的な領域も設けている。

本学科のカリキュラム構成は、7つの科目区分（入門、基盤講義、特殊講義、基盤演習、発展演習、実験・実習、卒業論文）に分けられている。

全専攻の1年次必修として、学科を構成する3領域（心理学・コミュニケーション学・言語科学）を横断的に学ぶため、入門の区分に「人間科学概論」を設置している。さらに、「人間科学概論 A・B・C」により、学科を構成する各専攻の特色を学ばせている。

各専攻では、各専門分野の特色を活かしつつ、以下のようなカリキュラムを編成している。

<心理学専攻>

心理学専攻では、実験、観察、調査、面接を通して実証的データに基づいて人間の心理を理解し、問題を探求する力を養うためのカリキュラムを編成している。

1年次では、入門の「認知心理学概説」、「発達心理学概説」、「社会心理学概説」、「臨床心理学概説」により、心理学の全般的・基本的知識を学ぶ。「1年次演習（心理学）」では、入門的な内容のテーマを扱い、基礎的な知識や技能を習得する。「基礎実験演習」では、心理学の方法論を初歩的な実験を通して理解していく。2年次では、心理学と他領域との学際的な領域にまで及ぶ基礎知識の獲得と、心理学の各研究領域における専門的な知識の習得のため、基盤講義の「心理学基礎講義 A・B」、「心理学研究法 1・2」と「一般実験演習 A・B」を履修する。「2年次演習（心理学）A・B」では、心理学のテーマについて深く

理解するとともに、より進んだ3年次の演習で必要となるスキルを身につける。3年次では、「3年次演習(心理学)A・B」により、自分自身の関心に従って希望の領域やトピックを取り扱う。3年次前期の「一般実験演習」では、発展的な研究技法(特に臨床的面接と社会心理学実験)を習得し、3年次後期の「特殊実験演習1」は、卒業論文の土台作りとなる実験演習を行う。4年次では、「特殊実験演習2A・2B」により、実験演習の集大成として自分自身の研究テーマに沿った学習を進め、4年間の学習の集大成としての「卒業論文」を完成させる。

また、2年次から履修できる「特殊講義」では、認知、知覚、発達、教育、臨床、社会の各心理学、精神保健学等の授業科目を専門領域に限らず、広く学ばせている。

<コミュニケーション専攻>

1年次では、入門に配置されている2種類の「コミュニケーション概論」で幅広く基礎的な知識を養い、「1年次演習(コミュニケーション)」で学習の仕方のみならず自分の意見をまとめプレゼンテーションを行う力も養う。特殊講義の「コミュニケーション特論」の各科目は、1年次から履修できるようにしている。

2年次では、「コミュニケーション研究法入門」及び「統計の基礎」で、コミュニケーション学で用いる研究法の概要を学び、人間科学及び社会科学の方法論を習得する。「2年次演習(コミュニケーション)」では、英語文献を読み、国際的に最新の知見に触れる。3年次では、「3年次演習(コミュニケーション)・」により、自己のテーマを卒業研究プロジェクトに組み立てていくために、先人の問題意識や方法論を文献から学ぶ。「コミュニケーション研究法実習」の各科目では、自己の研究テーマに沿った方法を4種類の研究方法から選択し、実践的にデータを収集・分析・報告するスキルを修得する。4年次では、3年間で学んだ諸知識を反映させて「4年次演習(コミュニケーション)・」を履修しながら、「卒業論文」に取り組む。

<言語科学専攻>

言語科学専攻では、入門に配置されている「言語研究入門A・B・C・D」で言語研究の第一歩として、基本的な概念と分析方法等を学ぶ(4科目のうち2科目を選択必修としている)。「Writing Skills1」(必修)で、標準的な英語の文体、及び、主題の提示や論旨のまとめ方を練習し、習得する。1年次にはこの他に言語音の調音メカニズムを学び発音・聴音の訓練をおこなう「一般音声学・」や「英語音声学」、言語と文化の相互関係について考察する「言語文化論」、さまざまな角度から異文化について理解を深めていくための「Cross-Cultural Understanding A」なども履修できる。

2年次では、言語の変遷や多様性、言語に関わる文化現象など、言語研究の幅広い基礎を築くとともに、研究に必要なスタディ・スキルを身につける。そのために必修として、「2年次演習(言語科学)」と「Writing Skills2」を課している。

また、「英文法・」では、英語の文構造についての基本概念を、「英語史・」では現在の英語の姿につらなる英語の変遷とその歴史的な背景について学ぶ。1年次から履修できる「一般音声学・」、「英語音声学」とともに、これらの科目は、言語分析に必要な知識や技能を身につけることを目的としている。その他、広い視野で言語の理解を深めるために「音韻論・」、「形態論・」、「語用論・」などの科目や、言語の文化現象を理解するための「文学とことばA・B」「言語とアイデンティティ」などの科目も置いている。また、言語教育の科目も2年次から履修できる。

3年次では、2年次までに得た基礎的な知見や技術を踏まえ、「3年次演習（言語科学）」を中心に各分野の研究を深めていく。3年次から履修できる発展演習には、卒業論文を英語で執筆する学生のための「Advanced Writing」「Advanced Reading & Discussion A・B」「Advanced Speaking A・B」を置いている。

4年次では、「4年次演習（言語科学）」により、これまでに学んだ知識や方法論を活かして、各自の研究テーマを追求し、4年間の勉学の集大成として「卒業論文」に取り組む。

また日本語教育の集大成となる「日本語教育実習」では、日本語学習支援を行うために必要なスキルや知識を身につけることができる。

各専攻では、柱となる学問分野の基礎となる科目を設置し、その重要度に応じて必修としている。周辺領域の科目については、学年の進行に合わせて選択科目として履修する。それぞれの専攻の基礎となる科目や演習を必修とし、特殊講義を選択（選択必修を含む）とする共通性があるが、専攻によってばらつきがある。また、心理学専攻においては、3年ごとに開講する科目*が多数置かれている。（*例：精神保健学A、精神保健学B、精神保健学Cを毎年1科目開講し3年で一巡とする等。）しかし、同じ科目名の授業科目を3科目とも履修している学生は非常に少ない。（2012年度4年次のデータにおいて、知覚心理学A、B、Cとも履修した者は2.6%、心理学特論（先端）A、B、Cとも履修した者は2.0%、他の科目はそれ以下の数値）

人間科学科の卒業単位に必要な単位数は64単位。その中に必修科目として「人間科学概論」2単位、「人間科学概論 A・ B・ C」から2単位、「卒業論文」8単位を含む。自専攻科目は42単位を修得することとしている。

人間科学科の設置科目数は、196科目で、通年換算で163コマの授業を開講している。履修者が10名以下の講義科目は、2011年度は4科目、2012年度は8科目である。

なお、人間科学科は、4年次進級条件とする科目は専攻によって異なるものの、全専攻で設けている。

数理科学科

数学、情報理学の2専攻を置き、理系学問の基礎となる数学を基に、数学、情報学、自然科学の分野を横断的に学ぶことを通して、数理科学的知識と柔軟な論理的思考力及び情報処理技術を養い、それらによって社会と科学技術の発展に寄与できる人物の育成を目的とする。柱となる学問分野は両専攻ともに数学、情報学、自然科学である。

数学専攻では、主として現代的な純粋数学（代数学、解析学、幾何学）と応用数学を、情報理学専攻では、主として情報学と自然科学（物理学、化学、生物学）更にはそれらを有機的に結びつけた情報理学（数理モデルの構築やシミュレーション）を学ぶ。それぞれの専攻が学問分野としての特徴をもちながら、学科全体として全ての理系分野に共通して

重要である数学を基盤としつつ、学生の多様な興味と目的に応える教育を行っている。

数理科学科は、2つの専攻のもとに9つの科目区分(数学基礎、解析学、代数学、幾何学、応用数学、情報学、自然科学、情報理学、講究)を設けている。2つの専攻は互いに関連が深く、それぞれの分野を相互に受講することが可能なので、以下、学科全体のカリキュラム編成として記述する。

1年次ではすべての理系学問の基礎となる数学のうち、特に重要な微分積分学と線形代数学の習得に焦点を絞る。その習得により、理系に必要な基礎的数学能力と計算力を養う。そのため「微分積分学」、「線形代数学」とそれらの演習の計6科目を必修として課している。2年次では1年次で得た数学能力を基盤に、数学(代数学、解析学、幾何学、応用数学)、情報学、自然科学(物理学、化学、生物学)のそれぞれの分野において、各分野の基礎となる基本的な概念や知識の習得を目指す。数学専攻では解析学、代数学、幾何学、応用数学の各分野の基礎となる科目を、情報理学専攻では、各分野の概論(情報学、物理学、化学、生物学)(選択必修科目)及び情報学の基本となる科目(プログラミング、ネットワーク、アルゴリズムとデータ構造など)を設置している。また、両専攻共通の科目として、数学、情報学、自然科学を有機的に結び付けるために、情報理学分野に「数理モデルとシミュレーション AI 及び A」を設置している。3年次では、それぞれの学生の関心の深まりに応じて、各分野において更に進んだ理論体系を学ぶことができるように科目を配置すると同時に、数学、情報学、自然科学をつなぐ数理モデルの構築や、コンピュータによるシミュレーションなどを扱う融合的科目「数理モデルとシミュレーション BI、B」も設置している。応用的な科目として、数学と情報学との関連性を学ぶ科目も3年次以上で履修できるように両専攻共通の科目として配置している。(例:「情報解析学 I」、「情報代数学 I」、「グラフとその応用」、「数理モデルと確率論 I」)自然科学分野では、2年次から4年次までにおいて、概論以外のすべての科目を履修できる。4年次ではこれまでに学んだ知識を総合して、深い理解に基づいて自ら問題を発見するとともに、統合的な問題解決能力を高めるために講究が設けられている。講究では、セミナー形式で輪読、実習、実験などを行い、主体的に学習や研究を進めてその結果を発表し、討論によって理解を深めさせ、問題解決の道を発見させている。

数理科学科の修得単位数は72単位。その中に「微分積分学」2単位、「微分積分学」2単位、「微分積分学演習」1単位、「微分積分学演習」1単位、「線形代数学」2単位、「線形代数学演習」1単位の6科目計9単位を必修として含む。自専攻科目は31単位を修得することとしている。

数理科学科の設置科目数は、104科目で、通年換算で71.5コマの授業を開講している。履修者が10名以下の講義科目は、2011年度は4科目、2012年度11科目である。

なお、数理科学科は、4年次進級条件とする科目は設けていない。

専攻間・学科間での学問領域の重複について

2009年度に行った自己点検・評価 (URL: <http://office.twcu.ac.jp/aboutus/disclosure/>)

jikotenken2009.pdf)において、学科、専攻の特色をわかりやすく、はっきりさせるために、学科間、専攻間の重複についての指摘があったが、今回もそれを継承し、以下の通りの指摘を行う。

学科間においては、人文学科日本文学専攻と国際社会学科国際関係専攻の日本文学、人文学科日本文学専攻と国際社会学科国際関係専攻及び人間科学科言語科学専攻では日本語学、人文学科英語文学文化専攻と人間科学科言語科学専攻の英語学・文学（翻訳）、また史学専攻と国際社会学科国際関係専攻との間で歴史学の重複が見られる。人間科学科コミュニケーション専攻と数理科学科情報理学専攻との双方に、情報学が置かれている。

専攻間においては、国際社会学科は、科目名が類似した科目がある。たとえば、「中国政治・経済論」と「中国経済論」、「国際政治経済」と「国際経済学」などがこれである。

人間科学科は、心理学専攻とコミュニケーション専攻との間で社会心理学の科目名の類似が見られる。心理学専攻の「社会心理学（マクロ）A・B」及び「社会心理学（個人間過程）A・B・C」及び「社会心理学（個人内過程）A・B・C・D」、コミュニケーション専攻の「コミュニケーションの社会心理学（対人）」及び「コミュニケーションの社会心理学（集合現象）」がこれに当たる。

【点検・評価、長所・問題点】

《学部・学科の構成》

現代教養学部が4学科から構成されていることについては、現状では大きな問題はない。しかし、2009年度の改組は、旧学科の枠組みの変更を最小限に止め、旧学科を専攻に移行させることが優先されたため、以下の二つの問題が残った。

- ・2 学部体制時代以来の懸案である、学部間及び学科間の学問領域の重なりが解消されていない。
- ・専攻の独立性が強く、学部を構成する基本の単位である学科のまとまりが依然として希薄である。

従って、学問領域の重なりを調整するとともに、各専攻のディシプリンを尊重しつつ、学科としてのまとまりを明瞭なものとし外部からも見えやすくすることが当面の課題（2014年度のカリキュラム改訂）となる。

その上で、本学創立100周年の年となる2018年に向けて、本学の教育理念の一層の具現化を目指し、且つ受験生の動向に留意して、現在の学科・専攻の構成を見直すことが必要である。

《学科別の問題点》

以上の全体的状況をふまえて、次に、学科別に検討を進める。

人文学科

当該学科の 4 専攻は、伝統的な哲・史・文の分野からなり、外から見てわかりやすく、構成上の問題はない。しかし、学科が基本の単位であるにもかかわらず、学科の下にある各専攻間のカリキュラムの擦り合わせが不十分である。専攻のディシプリンを尊重しながらも、学際的な視点から専攻間の接点を見出し、それを学科のカリキュラムに反映させることが求められる。

当該学科には、403 の科目が設置され、他学科の 2 倍にのぼっている。主に、3 年ごとに開講する科目を置いていることに起因するが、このためにカリキュラムが煩雑となっている。また、各専攻の年次演習についても単位数、科目名の不一致がある。ディシプリンを維持することは必要であるが、専攻間で調整し、均整のとれた、わかりやすいカリキュラムを構築する必要がある。

国際社会学科

現代教養学部の創設にあたって、社会科学教育の充実が、その目的の一つとして掲げられた。その所期の目的に照らして、国際関係、経済学、社会学からなる専攻配置となっており、その専攻配置は適切と言える。しかし、本学科の所期の目的にかなったカリキュラムとなっているか否かは検討を要する。

各専攻の年次演習は、到達目標に合わせて、基盤演習、発展演習に区分され、学生にとってわかりやすいものとなっている。講義科目は、入門、基礎講義、応用講義と、適切に区分されているが、科目名に「入門」とありながら、履修年次を 2・3 年次と指定している科目が見られる。各科目の到達目標と照らしあわせて、適切な科目配置及び科目名称とする必要がある。

国際関係専攻は、比較文化・地域研究・文化人類学を国際関係学と同等のレベルで学問分野の柱としているが、他の 2 専攻に比して、カリキュラムの体系性が不明確であり、当該専攻の目指すものが見えづらくなっている。柱の見直しが必要である。国際関係専攻には、テーマに沿った演習担当教員による応用講義の授業科目が置かれているが、特定の学生の履修を目的とする講義科目の配置は好ましくない。

人間科学科

新しい分野を切り拓く学科として心理学、コミュニケーション、言語科学の 3 つの専攻からなる学科を設置したが、各専攻間の科目配置の体系性を整えていく必要がある。

コミュニケーション専攻は、その柱とする学問分野に心理学、社会学、情報学を含んでいるが、それらが心理学専攻と社会学専攻と重なっているために、当該専攻の基本的なディシプリンが何なのか、外から見えづらいものとなっている。

言語科学専攻は、体系的なカリキュラムの構築が必要である。同専攻の設置科目は、他の 2 専攻の科目との関連性が明確ではない。柱となる学問分野を「言語研究」と「言語教育」におき、その分野を「言語研究」「翻訳研究」「言語教育」としているが、特に「翻訳

研究」の位置づけに問題がある。当該専攻の「他の 2 専攻との関わりの中で言語を学び、言語の仕組みと言語使用に対する洞察力」を育むという目標が、カリキュラムに十分に反映されていない。

学科全体を見ると、種々の分野からなる多様な科目が設置されているため、科目間の繋がりが見えにくい。

実験・実習の区分では、心理学専攻、コミュニケーション専攻では必修科目を置いているが、言語科学専攻は選択科目である。言語科学専攻は、人間の科学を標榜する学科を構成する一部門として、将来的に設置科目の見直しを視野に置いて、他の 2 専攻との結びつきを重視しながら、言語科学専攻の特色を明確にする必要がある。

数理科学科

元来 1 学科であったものを 2 専攻に分けた経緯があるため、専攻間の関連性はわかりやすい。しかし、情報理学専攻は、情報学と自然科学とを連携させ、数理モデルの構築、コンピュータによるシミュレーションなどを取り込んだ教育を目指していたが、それが浸透しているとは言い難い。

また、数理科学科は、他学科の学生が履修できる科目が非常に少ない。今後、他学科との接点を見出し、文系学科との連携を探っていくことが求められる。自然科学系の位置付けについては全学的な見地からの検討が必要である。

必修科目の見直し、及び 4 年次の講究へと繋がる体系性あるカリキュラムの構築が課題といえる。

《複数の学科・専攻にわたる問題点》

次に複数学科・専攻に係る問題点について検討する。

4 年次への進級条件が、同じ学科を構成していながら、専攻によって異なるケースがある。学科としてまとまっていくために、専攻間で調整を行う必要がある。(例：人文科学科は日本文学専攻のみ進級条件を設けていない、国際社会学科は国際関係専攻のみ年次演習を進級条件としている。経済学専攻、社会学専攻は進級条件となる科目はない。数理科学科は 2 専攻とも進級条件を設けていない。こうした不均衡について検討の必要がある。)

教育課程においては、各学科の柱となる学問分野、各学問分野間の関連、柱となる学問分野を構成する領域間の関連性について、依然として不明確な部分が残っている。

2 学部体制であった際、文理学部は、歴史と伝統によって培われた学科縦割りのディシプリン重視の性質が強く、現代文化学部においては、「学際性、国際性、現代性」の追求を各学科の特色としていた。2009 年の改組では、両者の特徴が十分に統合されぬまま新学部に移行した。1 学部統合されたことを受けて、現代文化学部の特色であった学際的教育は専攻単位で進めるだけでなく、現代教養学部として、学部及び学科単位の取り組みとして広げていかなければならない。その意味で、学科間専攻間で重複する領域が存在することは、

学科・専攻のアイデンティティを希薄にしている。

履修者が少ない講義科目等がいずれの学科にも散見される。教育目標に照らして必要な科目であるならば、それらの科目の位置づけを明確にし、履修者数の増加をはかる具体的な対策、指導がとられなければならない。

【将来の改善に向けた方策】

2014年度に、下記の点を軸とし学科のカリキュラムの改訂を行う。

学部として取り組む課題

学科の目的が明確となるよう、核となる科目を中心に据えた体系的なカリキュラムを構築し、学際的な教育を進めることを目指す。その基礎となる学科科目の充実、学科の中の初年次教育の充実は特に重要である。

2014年度改正のカリキュラムには、1年次の演習を、今まで設置していなかった人間科学科の言語科学専攻及び数理科学科にも置き、初年次教育を強化する。全学で共通に含めるべき内容を策定する。教育理念、学部の教育目標をもとに、学科の人材養成の目的、それを達成するための学年ごとの目標を明確に設定する。

学生が自分自身で履修計画を組み立て、大学での主体的な学びへと繋げることができるよう、適切な科目配置を行い、各科目の学修を通して身につける知識・能力・スキルを示した具体的な到達目標の設定（学科・専攻の目的、教育目標に沿って設定すること）を行う。マッピング、学修の段階・順序・位置づけを示したナンバリング、個々の科目がどのように連携しているかを示すカリキュラムマップの導入を目指す。そのために、必修・選択必修・選択の別、年次指定等の見直しも必要である。

学科の中でどの専攻にも等しく必要な知識・能力・スキルを身につけさせる科目の再検討を行う。

進級条件に指定する科目については、学科内で擦り合わせる方向で検討する。

今後の国際化への対応を視野に入れ、現行の通年科目は半期科目とする。

学生の多様な関心に応えるために、科目にヴァリエティを持たせることは必要である。しかし、一方で学習が散漫となることも危惧される。学生が4年間という限られた時間の中で、学部及び各学科の教育目標にそって、着実に知識を修得し、これを応用し自立できる力を蓄えられることを期して、また同時に、本学の規模、授業料の公平性も念頭に置きつつ、2014年度のカリキュラム改正では可能な限り、科目数、開講コマ数を整理する方向で検討する。3年ごと開講の科目については、可能な限り整理・統合を行う。

学科・専攻のアイデンティティを明確にしたカリキュラム編成を前提に、「専門性ある教養人」育成のため、他学科・専攻の科目も一定の枠組みで履修させるような履修モデルを提示する。

学科間、専攻間の重複の解消について、引き続き検討する。

学科として取組む課題

人文学科

- ・設置科目数が非常に多いため、講義科目を整理・統合する。
- ・3年ごと開講科目の見直しを行う。

国際社会学科

- ・国際関係専攻3・4年次演習の担当者が演習の履修者を対象として開講している応用講義の各科目は、科目配置の必要性を全体のカリキュラムの中で検討する。少なくとも履修者の拡大を図ることが必要である。
- ・入門の区分の設置科目は、授業内容に沿った配当年次とする。区分の目的に沿って専攻間で摺合せをする。

人間科学科

- ・言語科学専攻に、初年次教育を強化するため1年次の演習を設置するとともに、履修の自由度の高いカリキュラムを見直し、その体系性を図る。
- ・翻訳研究の位置づけを明確化する。
- ・心理学専攻の3年ごと開講の科目の見直しを行い、科目の整理を行う。

数理科学科

- ・初年次教育を強化するため1年次の演習を設置するとともに、履修の自由度の高いカリキュラムを見直す。新たに必修・選択必修の要件を設ける。
- ・唯一の理系学科ではあるが、単一の現代教養学部の中に位置していることに鑑み、他学科の学生が履修可能な授業科目を配置する。
- ・自然科学系の科目については、全学的な見地からその位置づけを検討する。

今後に向けて

学問領域の重なりを調整するとともに、各専攻のディシプリンを尊重しつつ、学科としてのまとまりを明瞭なものとし外部からも見えやすくすることが当面の課題（2014年度のカリキュラム改訂）となる。

これに伴い、カリキュラム、教員人事の立案を、従来のように専攻中心に進めるのではなく、学科を基本の単位とする視点から進めることが必要となる。

2014年度のカリキュラム改正は、時間的な面から可能な部分のみを改善する。

しかし、18歳人口の更なる減少の中で本学が多くの高校生から選ばれ続けてゆくために、学部・学科・専攻全体にわたる改革の検討を開始する。

リベラル・アーツ教育の推進、女性の自己確立とキャリア探求を具現化していくために、教員採用の人事方針、組織の見直しも含めた検討を2013年度の後期から着手する。改革の方針の策定は、学部長のリーダーシップのもとに進めていく。

各専攻の対象学問分野（『履修の手引』掲載の「学習案内」を参照）

2012.6.15

学科	専攻	柱となる学問分野	領域	備考
人文学科	哲学専攻	哲学	西洋哲学 倫理学 美学・芸術学 キリスト教学 東洋思想	
	日本文学専攻	日本語学 日本文学 中国文学	日本語学 言語情報処理 日本文学（古典・近現代文学） 日本文化学 中国文学	
	英語文学文化専攻	英語学 英語文学	英語学 英語文学（英文学 米文学 英語圏文学） 英語圏文化	
	史学専攻	歴史学	歴史学 日本史 東洋史 西洋史	
国際社会科学	国際関係専攻	国際関係学 地域研究・比較文化 文化人類学	国際関係学 歴史学 比較文化 文化人類学 政治学 女性学 社会言語学 （日本、アメリカ、アジア、アフリカ等の歴史、文化、思想、社会、政治、経済、外交）	
	経済学専攻	経済学	経済理論 経済史 経済政策 応用経済学 統計学	学位授与機構の専攻区分の審査基準を参照した
	社会学専攻	社会学	社会学理論 社会調査 老年社会学 労働社会学 福祉社会学 家族社会学 文化社会学 女性学・ジェンダー論	社会の諸領域に関しては、専任教員の専門分野を記載
人間科学科	心理学専攻	心理学	心理学（認知・知覚 発達・教育 臨床 社会）	
	コミュニケーション専攻	コミュニケーション学	コミュニケーション学（心理 社会 メディア 情報 国際・文化）	
	言語科学専攻	言語研究 言語教育	言語研究（英語 日本語 対照研究 言語調査） 翻訳研究 言語教育（英語 日本語）	
数理科学科	数学専攻	数学	解析学 代数学 幾何学 応用数理学 情報学 情報理学	
	情報理学専攻	情報学 自然科学	数学 情報学 情報理学 物理学 化学 生物学	